

はじめに

ベルリンは夜の一一時を迎えた。車など一台も走っていないのに、歩行者は横断歩道の信号が青に変わるのをじっと待っている。一方、そこから六〇〇〇キロ離れたボストンはラッシュアワーで、通勤者たちは「横断禁止」の標識など気にも留めずにタクシーの前を駆け抜ける。南へ下ったサンパウロは夜の八時。ストリングビキニをつけた地元民が、公園で騒いでいる。シリコンバレーは昼下がりで、Tシャツ姿のグーグル社員がピンポンに興じている。スイスのチューリヒでは、長年にわたり四ページからなる服装規定を守ってきたUBS銀行で、役員がネクタイをゆるめもせずに深夜まで働いている。

ドイツ人は過剰なまでに規律を守るとか、ブラジル人は肌を露出しすぎだなどと、私たちは笑うことはあっても、そのような違いが生まれる背景についてはほとんど考えない。服装規定や歩行者の行

動パターンにとどまらず、社会によるふるまいの違いは根深く広範囲におよんでいる——政治から子

育て、企業経営、信仰、働き方から休暇の過ごし方に至るまで。過去数千年のあいだに、人類は九五カ国に暮らし、七〇〇以上の言語をもち、何千もの宗教を信仰するに至った。たとえばアメリカという一つの国だけを見ても、フアッシュョン、方言、道徳、政治的志向には無数の差異があり、ときにはすぐそばで暮らす人のあいだにもそうした違いが見られる。人間の行動には、想像を絶するほどの多様性がある。とりわけ、ゲノムの九六パーセントがヒトと同じであるチンパンジーが、人間と比べてどの群れでもはるかに同質であることを考えると、まさに驚きというしかない。

私たちが多様性をあがめて分断を嫌うのはもともとだが、それらの根底にある「文化」については驚くほど無頓着だ。文化とは私たちの経験をめぐる解きがたい謎であり、私たちに残された最後の未知なる領域の一つだ。私たちは大きな脳を使って、信じがたいようなテクノロジーの偉業をなし遂げてきた。重力の法則を発見し、原子を分裂させ、地球にケーブルを張りめぐらせ、死に至る病気を撲滅し、ヒトゲノムを解読し、iPhoneを発明した。犬を調教してスケートボードに乗らせることにさえ成功した。しかしテクノロジーがこれほどぐましく発展しているにもかかわらず、それらに劣らず大事な「自分たちの文化的差異」については愕然とするほど理解が進んでいない。

テクノロジーのおかげで私たちはかつてないほど互いにつながり合うようになったのに、なぜそれほど分断しているのだろうか。分断の根底には文化が存在する。だから文化について、もっと知る必要がある。もうだいたい前から、政策の専門家も一般人も、文化の随所に見られる複雑な特徴や差異を説明する根本的な要因を見出そうと努めてきた。多くの場合、私たちは「文化の表れ」である表面的な

特質に目を向ける。住んでいる場所が民主党寄りの州か共和党寄りの州か、地方か都市か、西側の国か東側の国か、途上国か先進国かによって人の行動が決まるという考えにもとづいて、文化間の分断を地理的な観点から説明しようとする。文化というのは地域の違いで説明できるのか、それとも「文明」の違いで説明できるのか、私たちは思いあぐねる。だが、これらの区別は答えよりもさらに多くの疑問をもたらすことが多い。なぜなら、文化間の差異の根底にあるものが見落とされているからだ。つまり、差異を生み出す文化の基本的な「枠組み」がとらえられていないのだ。

もっと説得力のある答えは、ずっと目の前にあつたのに見過ごされてきた。物理学や生物学、数学などの分野では、単純な原理で膨大なことがらを説明できる。それと同様に、文化間の差異や分断の多くも、視点をちょっと変えるだけで説明できるのだ。

人の行動というのは、じつはその人を取り巻く文化が「タイト」か「ルーズ」かに強く影響される。文化がどちら側に属するかによって、社会規範の強さやその規範を強制する厳格さが異なる^③。どの文化にも、社会規範、すなわち許容されるふるまいに関するルールが存在し、ふだんは当たり前だと受け止められている。私たちは子どものうちに何百もの社会規範を学習する。たとえば人の手から物をひたたくってはいけないとか、歩道では右側（住んでいる地域によっては左側）を歩けとか、いつも服を身につけるなどというのがそれだ。さらに私たちは生涯にわたって新たな社会規範を学び続ける。葬儀には何を着ていくべきか、ロックコンサートや交響楽団の公演ではどうふるまうべきか、婚礼や礼拝などのさまざまな儀式をどう執り行なうべきか。社会規範は、集団を結束させる接着剤のようなものだ。私たちにアイデンティティーを与え、新たなかたちで互いに協調するのを助けてくれる。だ

が、その接着剤の「強さ」は文化によって異なり、それによって私たちの世界観、環境、さらには脳にも大きな影響が生じる。

タイトな文化は社会規範が強固で、逸脱はほぼ許容されない。一方、ルーズな文化は社会規範が弱く、きわめて寛容だ。前者は「ルールメーカー」(ルールを作る者)、後者は「ルールブレイカー」(ルールを破る者)と言える。比較的ルーズな文化をもつアメリカで街を歩けば、ほんのわずかなあいだでも、ごみのポイ捨てから信号無視、犬のふんの放置など、軽い逸脱を次々に目撃することになる。対照的に、めったに逸脱することのないシンガポールでは、舗道はごみ一つなく、信号無視などまるで見かけない¹⁰。ルーズな文化のブラジルはどうだろう。街なかの時計はすべて違った時刻を指し、ビジネスの会議には遅刻するのがむしろふつうだ。絶対に遅れずに来てほしい相手には、「com pontualidade britânica」(イギリス人並みの時間厳守で)と言う。また、タイトな国である日本では、時間厳守が非常に重視される。電車の到着が遅れることは、ほぼ皆無だ。まれに遅延が生じると、乗客は鉄道会社の発行する遅延証明書を職場の上司に提出し、始業時刻に遅れたことを積明する¹¹。

こうした文化間の差異や分断の事例が数多く存在するのと同じように、それらが生じる理由もたくさん存在するはずだ。何世紀ものあいだ、そう考えられていた。しかし本書では、文化間の差異の奥底に存在する構造は一つだということを示していく。そこで明らかになる重大な事実、文化の規範の強さはランダムに決まるわけではない、ということだ。完璧に筋の通ったロジックが、そこにはひそんでいる。

おもしろいことに、国どうしの差異を説明する(タイト/ルーズ)のロジックで、州や組織や社会階級や家庭のあいだの差異も説明できる。タイトとルーズの差異は、役員会議室や教室や寝室でも見られるし、交渉のテーブルや食事のテーブルにも出現する。公共交通機関やジムでのふるまいや、友人やパートナーや子どもとのあいだで起きる対立など、日常生活の中で生じる、一見するとありふれた事象と思われるものが、じつはすべてその根本にタイトとルーズの差異をはらんでいる。あなたはルールメーカーだろうか、それともルールブレイカーだろうか。本書では、人がこのいずれかに分かれる理由のいくつかを明らかにしていく。

身近なコミュニケーションにとどまらず、世界各地で見られる紛争や革命、テロ、ポピュリズムのパターンについても、タイトとルーズの差異で説明できる。世界のどこへ行ってもタイトとルーズが集団を分断し、文化内の結束を強めるとともに文化間の隔たりを広げる。この隔たりは派手なニュースになるものばかりではなく、日常の人間関係の中で露見することもある。

タイトとルーズの対比に目を向ければ、周囲の世界について説明するだけでなく、将来に起きる衝突を予想し、さらにはそれを回避する方法を示すこともできる。金びかのカフスポタンをつけたウォールストリートのビジネスマンを建設作業員が小馬鹿にした目でらんだときには軽い衝突が起きるかもしれないし、聖典の教えに従って生きる人と導きの書をまったく受けつけない人とが出会った場合にはもっと致命的な衝突が起きるかもしれない。だが、タイトとルーズはそうした分断を予想する鍵となる。多くの人にとって、本書に足を踏み入れることは、いわば「マトリックス」の世界に入るようなものであり、今までとはまったく違った見方で世界をとらえることになるだろう。

1 カオスへの処方箋

人がいつも遅刻する世界があるでしょう。電車もバスも飛行機も、決して定刻に運行しない。会話の途中で邪魔が入るのは日常茶飯事で、知り合ったばかりの相手の体にやたらと触れたがるくせに、アイコンタクトはいつさいしない。起きたくなったらベッドから起き出し、家を出るときには服を着る人もいれば着ない人もいる。レストランはいつでも開いていて、客はメニューにない料理を要求し、食べ物^を咀嚼しながら口を開け、しょっちゅうげっぷをし、他人の皿から勝手に料理を取って食べる。混んだエレベーターでは、歌ったり、濡れた傘を振り回して他人の体につけたり、好き勝手な向きで立っていたりする。学校に行けば、生徒は授業中に携帯電話で話し続け、教師にいたずらをし、試験中に堂々とカンニングをする。街の通りでは、誰も赤信号など気にかげず、道路の両側を車が走る。歩行者はごみを無造作に投げ捨て、自転車置き場から他人の自転車を盗み、大声で悪態をつく。セツ

クスは寢室などのプライベートな場所だけでなく、公共交通機関や公園のベンチや映画館でやってもいい。

これは社会規範のない世界、社会的に合意された行動基準をもたない世界だ。

幸いにも人間は、こんな事態を避けるために社会規範を生み出し、維持し、守らせることができ、その不思議な能力はほかのどの種よりもはるかに高い。実際、私たちは超規範遵守的な種族だ。社会のルールや慣習に従うことに多大な労力を費やしながらか、そのことに気づいてすらいない。そのルールが理不尽なものであっても、やはりせつせと従うのだ。

いくつか例を見てみよう。ニューヨークでは毎年大晦日に何百万もの人が凍てつく寒さの中で集まり、タイムズスクエアに立つポールから球体のオブジェが降下する年越しのイベントに大歓声を上げる^①。これと同じくらい妙な新年の風習はほかにもある。スペインでは、年越しの瞬間に一二粒のおどろを猛然と食べる^②。チリでは、スプーン一杯のレンズ豆を食べて幸運を祈願する^③。スコットランドでは、金網に燃えやすい材料を詰めて火をつけ、頭のまわりで振り回す。毎年、気分を高ぶらせた何万人もの群衆が各地のスタジアムに集まり、格闘技や音楽の演奏やお笑い芸を見ながら歓声や叫び声を上げ、ときには絶叫することもある。

これらの風習はたいいてい大人数の集団で行なわれるが、もっと少人数で行なわれるものの中にも、やはり妙な風習がいろいろある。なぜ女性は生涯で最高に幸せな日に純白のドレスを着るのか。なぜ人は一二月になると立派に育った木を切り倒して飾りつけ、枯れるまでリビングルームに置いておくのか。アメリカでは、子どもたちに見知らぬ人と話をしてはだめと言っておきながら、なぜ10月3

日には仮装姿で街に繰り出して菓子をせびらせるのか。ほかにも世界各地で、同じく不可解な行動が見られる。たとえば、なぜインドでは、クンプ・メーラーの祭りの期間に数千万という人々が集まり、汚れて冷たい川で沐浴する^④のか。

集団の外から見ると、社会規範には妙なものが多いが、内部の者にとっては当たり前のことなのだ。社会規範のなかには、規則や法律として確立しているものもある（赤信号を守るとか、他人の自転車を盗まないなど）が、暗黙の了解で成り立っているものもある（電車内ではほかの乗客をじろじろ見ないとか、くしゃみをするときは口を覆うなど）。服を着るとか、電話に出るときには「もしもし」と言って電話を切るときには「失礼します」と言うといった、日常のありふれた行動となっているものもある。一方、クンプ・メーラーやハロウィーンのように、学習された儀式として、日常から離れた特別な場で行なわれるものもある。

社会規範は、私たちのまわりのいたるところに存在する。そして私たちは絶えずそれに従う。サケにとっては川を遡上するのが自然であるように、私たちは当たり前のこととして社会規範に従う。しかし皮肉にも、社会規範はあらゆる場所に存在するくせに、たいいていは目に見えない。多くの人は、自分の行動が社会規範にどれほど誘導されているのか、ほとんど気づかずにいる。さらに重要なことに、社会規範がどれほど必要かに気づいてもいないのだ。

これは人間をめぐるといなる謎だ。これほど強い影響を受けて生涯を過ごしながら、その作用を理解せず、気づきさえしない。そんなことが、いったいどうしたらありえるのだろうか。

規範を守るのは生まれつき^①

子どもは何歳くらいから社会規範を覚え始めるのか。多くの子どもが幼児教育を始める三歳くらいからか、それとも幼稚園に通う五歳あたりか。じつは、規範に従おうとする本能はそれよりはるかに幼い時期から現れる。研究によれば、赤ん坊は言葉をちゃんと話せないうちから規範に従い、規範を守らない人がいれば罰を与えたがるのだ。

ある画期的な研究によると、幼児は反社会的な行動をとる動物の操り人形（ガラガラの入った箱をほかの人形が開けるのを邪魔したり、おもちゃのボールを奪い取ったりする）よりも、社会規範に則った行動をとる人形（箱をほかの人形が開けるのを手伝ったり、ほかの人形が落としたボールを拾って渡してあげたりする）を明らかに好むらしい。^⑥

実際、子どもは三歳になるまでに、規範を破った人を積極的に非難するようになる。ある研究で、二歳児と三歳児にお絵描きか粘土細工をさせて、その隣で二体の操り人形にもお絵描きか粘土細工をさせた。^⑦一方の人形がいなくなると、その人形の絵や粘土細工を残った人形がぐちゃぐちゃにし始める。二歳児はこれを見ても特別な反応を示さないが、三歳児はおよそ四分の一が乱暴者の人形に向かつて「そんなことしちゃだめ！」などと声を上げる。道徳的には問題のない場面でも、幼児は非難の気持ちを表す。なにか適当な行動を三歳児に教えてから、人形がそれを不正確にまねしているのを見せると、子どもは強硬に抗議する。^⑧ここで明らかなのは、子どもが周囲の環境から社会規範を解釈することを学習するだけでなく、自ら規範を作って他者にそれを守らせることも学習するという点である。

る。

人間はきわめて高度な規範心理を進化させていて、母胎から生まれ出た瞬間にそれを持ち始める。実際、人間がほかの動物と違う唯一無二の種であるのは、この心理のおかげなのだ。ほかの動物の名誉のために言えば、きわめて高度な社会的学習をする種は少なくない。たとえば九本のとげをもつトゲウオという魚は、よそと比べて空いている餌場よりもほかの魚が餌を食べている餌場を好む。^⑨ドブネズミが餌を食べる際には、手本とするネズミが食べているのと同じものを食べる。^⑩鳥も餌を探すときに、自分の群れの鳴き声による指導にきつちりと従う。^⑪ただし今のところ、動物が単に相手に合わせるか群れの一員になるといった社会的な理由でほかの個体をまねするという証拠は得られていない。

ドイツの研究者が、きわめて独創的な実験によって、まさにこの点を証明した。^⑫三つの箱を組み合わせたパズルの装置を作り、それぞれの箱の上面に小さな穴をあけた。実験の開始時、被験者となる幼児とチンパンジーに、ある穴にボールを入れるとおいしいおやつがもらえることを学習させる。次に、ほかの子どもかチンパンジーが箱をいじっているところを見せ、別の穴にボールを入れたときにおやつをもらっていることを理解させる。今度は被験者に装置を渡し、どの穴にボールを入れるか観察する。その結果、子どもはほかの子どもの行動に合わせて穴を変更することが多かった。ほかの子どもに見られている場合には、特にその傾向が見られた。このことから、子どもが戦略を変更するのは、仲間の戦略のほうがすぐれているという理由だけでなく、社会的な理由もかかわることがわかる。つまり仲間であることや集団の流儀に従っていることを示すために、戦略を変更することもあるのだ。